

二次元ドリームノベルズ / PDF立ち読み版

ソードアート・オンライン 西

小説 舞麗辞

挿絵 たちばな

第一話	嵐を呼ぶ転入生！	006
第二話	覚醒するスターダスト	035
第三話	新たなる刺客	056
第四話	紅い瞳の錬金術師	070
第五話	生徒会長の正体	115
第六話	決戦！ 生徒会長選	167
第七話	茜の選択	200

登場人物紹介

Characters



かぐらざかあかね 神楽坂茜

学園に転入してきた天真爛漫な女子校生。空手の有段者でスポーツ万能だが頭はあまりよくない。学園に自由を取り戻すため、生徒会と対立する。

エリカ＝サザーランド

学園を支配する生徒会のナンバー2。剣道や居合、フェンシングなどあらゆる剣技に精通している実力者。

くじょうるか 九条流香

生徒会のナンバー3。幼い容姿で可愛らしく振る舞いながら、内には嗜虐的に歪んだ本性を秘めている。

かきはらことの 笠原琴乃

絶対的な力を有する学園の生徒会長。学園内にはほとんど姿を見せず、顔を知る者もごくわずかしかない。

「この変態ッ!! ヒトのお尻なんか見てッ……こんなことして何が楽しいのッ!?!」
恥ずかしさを紛らわせるため喉が痛くなりそうなほどの怒鳴り声を上げる。

激しい戦闘の最中、ショートツごと食い込んでしまったのだろう。晒されたスパッツ尻はたつぷりとした尻肉の丸みはもちろんのこと、桃割れの深さまで手に取るように分かる。

股間に至っては陰裂の長さまで分かりそうなくらいクッキリと浮き出しており、もしスパッツの生地が肌色だったら遠目には下穿きを穿いていないように見えたことだろう。

「わたしが見惚れるほどのお尻だもの。皆にも見てもらわなくちゃもったいないわあ」

言われて周囲を見回す。見ている。五千人がこちらを見ている。いや、自分を見ている。

男子たちは眼をカメラのレンズみたいに大きく見開き、ほとんど前のめりになって舞台上の痴態を脳裏に焼きつけている。女子たちは我がことのように顔を赤らめながらそれでも視線を逸らさずこちらを見続ける。視線が、特に男子の視線が。突き上げたヒップや食い込む股座に向かって痛いほど突き刺さっているのを感じる。

「やだ、みんなそんな……そんな目で見ないでよ……エッチな目で見ないでよおっ!!」

思わず叫ぶ茜だが、視線はなおもチクチクと桃肌を刺し続ける。卑猥な視線、同情の視線——多種多様の目に晒され、恥ずかしさのあまり背骨がビリビリと痺れるようだった。

「うふふ……なんだったら。もつとエッチな目で見られるようにしてあげましょうか?」

それまで縛りつけるだけだった肉紐がうねりだした。手首や胴体への締めつけはそのままに、ぐにゆりぐにゆりと蠢きながら胸元へと巻きつく。ギュギュッ……ブレザー越しに



膨れ上がった二つの乳峰にとぐるを巻き、絞り上げるように食い締めてくる。

「やっ、むねえっ、もっ揉んじやだめっ……」

触手の表面を覆うジェル状の粘液が衣服から染み込み肌を濡らす。力強い乳按摩に痛みを感じつつも、昨日琴乃によって乳快楽の味を知った柔肉はその奥底で生じるジリジリと焦げつくような乳悦を認めないわけにはいかなかった。

足首に巻きついた触手もニユリユリユツと滑り、両脚の間へと入り込むと内股を舐めるようにして擦り始める。脚に取りついた触手の肌はブラシのような繊毛状の肉突起が生え揃っている。人肌のように生温かく、ぬめぬめとした粘液にまみれた無数の肉毛。そんなものに粘膜を除けば恐らく一番敏感な箇所をブラッシングされると、立っているのも辛いほどの痺れが膝を襲い赤毛少女はガクガクと膝を震わせた。

(こんなつこんな状況なのにッ……気持ち、いい——!!)

股間がジュンツと疼き、粘膜が炎症を起こしたみたいにチリチリ焼けて粘液を滲ませる。(だめっ、濡れちゃだめえっ!! 今、今濡れちゃったら……皆に見られちゃう、感じちゃつてるのばれちゃうッ!!)

触手の責めから逃れようと身体を激しく揺さぶるも、どうやっても縛めは解けない。しかも前屈姿勢で暴れるその様子は、尻を振って誘っているかのようで堪らなく扇情的だ。

その上動けば動くほど、触手のいやらしい肉と激しく摩擦する羽目となり、じわりじわりと肉割れの疼きは染み出してゆく。眼鏡の生徒会長はしばらくそんな様子を見つめてい

たが、何かを思い出したかのように少女の顔を覗き込んできた。

「そういえば。前の決闘で茜ちゃん、流香と戦ったじゃない？ あの子の本性を知っている生徒会の者は皆、彼女のこと性悪だつて言うんだけど——あなた、どう思う？」

「流香ちゃんの悪口言うな!! そりゃあたしだつて酷いことされたし、確かにいい子どは言えないけど——あの娘ガウディには優しいんだよ。それに昨日はあの後、本気で泣いてたんだ。ごめんなさいって何度も……お前なんかに比べたら、百万倍もマシだよ!!」

友人をけなされた茜はついカツとなり早口でまくしたてる。対する生徒会長は怒りをぶちまけ相手を愚弄するような言葉を浴びせられながらも、深く頷いてみせた。

「わたしも同意見だわ。あの娘は単に■■■なだけ、思いつくイタズラだつて可愛いものだわ。だつてそうでしょ？ あなたとの決闘の時。あたしだつたらこうしたわ——!!」

ズンッ。琴乃の腕が、赤毛少女の下腹部をえぐつた。ぐりいいい……そのまま、拳を百八十度回転させる。まるで内臓を上下逆にされたみたいだ。気持ちちが、悪い。

ぐるっ……ぐきゆるううううう——……!!

「ひゃああっっ!!」

いきなりけたたましく鳴り響いた品のない音に、茜が身体を強張らせた。

（えっ……なっ……お、おなが痛いっ!!）

差し込むような痛みが下腹部を襲う。琴乃にえぐられたせいでだろうか、急に——。

（お、お……おトイレ、行きたくなっちゃった……!!）

間違いない。この能力は九条流香のアルケミスト。前回の決闘で経験済みだ。しかし今回は勝手が違う。あの時はいくらでも人目を避ける手はあった。しかし今は拘束されている最中だ。しかも——下半身の生理的欲求は尿道ではなく、直腸内部で燻っていた。

「おしっこ漏らすより、コッチを漏らしちゃう方がぜえったい恥ずかしいものねえ♪」

満面の笑み。琴乃のそれは、トランプのジョーカーみたいに禍々しかった。邪悪な内面が滲み出ているかのよう。彼女の意図を察した茜は紅い頬を青褪めさせた。

「あ……ええっ!? うそ……でしょ……? 何考えてんの……あたまおかしい……よ」

漏らす……漏らさせられる! 全校生徒の前で、お漏らしさせられる!! ヒトの尊厳をも踏み躪ろうという悪魔の暴挙に、奥歯を震わせ首を振る。最低、最低の企みだ。

(お腹苦しい……こんなことならお昼ご飯、お腹いっぱい食べてくるんじゃない……)

だが、悪魔の奸計はそれだけに留まらない。突然モーター音が頭上で響き始めた。

「なに……」

顔を上げると、舞台上のスクリーンが上から伸びてくるのが見えた。千インチは下らない、途方もなく巨大な銀幕。それが降りきると、パッと光が灯って何か映像を映し出す。しかし暗くてよく分からない。少し、引きの絵になる。相変わらず暗いが何か蠢いている。背後にヘンな気配。茜が振り返ると、いつの間にもやら舞台ギリギリの辺りに十人前後の男子が群がっていた。そしてその中の一人がデジカメを手に自分を映している。

(え……じゃ、この……スクリーンに写されてるの……あたしの——お尻ッ!?)

画面が暗いんじゃない。画面いっぱい濃紺のスパッツが映し出されていたのだ。また画面が引き、今度は膝上から尾骶骨までが画面に収まるようになる。

「やだっ、そんなところ映さないでよっ！ 変態っへんたいいいいっつ!!」

叫んだ声が彼女が思った以上の大音響で会場を揺るがし、少女はカメラ以外の男子が手にしているものに気づく。マイクだ。よく記者会見などでレポーターが持っているような棒状の集音器。彼らは揃いも揃ってそれをこちらに向かい差し出していた。何人かは顔に見覚えがある。確か、生徒会室でエリカを乱暴していた奴ら——生徒会のメンバーだ。

「何よこいつらっ!! 決闘は一对一でしょっ!? 卑怯よおっ!!」

「別に会長選の邪魔はしてないですよ。会長選の撮影はフツーに許可されてるわけですし、後ろの生徒にもちゃんと実況してやらなきゃ不公平じゃないですかあ?」

猛然と抗議するが、男子らはそう言ってヘラヘラ笑うばかりだ。会長選を記録しているだけ。額面通り取れば確かに直接危害を加えられているわけではない。あまりにも卑劣なやり口に少女は地団駄を踏みたくなるが緊縛のせいでそれさえ叶わない。

ぐきゅるっぐきゅるるるるううう——!! 少女のけたたましい腹痛音をマイクが拾い、数百倍にボリュームを上げて会場内へと垂れ流す。

「こらっ!! マイク向けるなっ! ヒトのお腹の音なんて聞くなああっつ!!」

恥ずかしい——自分が今おトイレを我慢しているのだと皆に思われるだけでも、充分すぎるくらい恥ずかしかった。これでもし、本当に漏らしてしまったら——。

「なら敗北を認めなさい。そうすれば、許してあげる——それともお腹の中の汚いものを皆の前でぶちまけたい？ 茜ちゃんはマゾさんだから、そっちの方が嬉しいのかしら？」

悪魔が取引を持ちかけてくる。ズンズンと鳴り響くような腹痛が、赤毛少女を後押しする。だが、こんな卑怯な手に屈するわけにはいかない。甘言に乗せられるわけにはいかない。

「誰がそんなことッ!! それにあたしはあんたみたいな最低の人間になんて、絶対負けな
いんだからッ!!」

力いっぱい虚勢を張る。脂汗が額に滲み始めている。お腹も遠くで雷鳴が響いているみたいにゴロゴロとうるさい。でも、まだ我慢できないほどではない。

(我慢の利くうちに、なんとか反撃の糸口を探すっきゃないッ!!)

そんな赤毛少女の思いを知ってか知らずか、菌を食いしばる少女の健気な姿を見つめていた生徒会長は、何か素晴らしいことを思いついたかのように明るい表情を作った。

「じゃあちよつと話題を変えましょう。茜ちゃん、あなたオナニーはするのかしら？」

最初何を言われたのか分からなくてきよとんとし、すぐに顔を真っ赤にする。公衆の面前で、いきなりなんてことを聞いてくるのだろう。今更ながら彼女の良識を疑った。

「そつ、そつ、そんなのしないっ!! あなたみたいな変態と一緒にしないでッ!!」

紅潮した頬を転がる汗を撒き散らすほど激しく首を振る。ポニーテールが詰問を振り払うように弧を描いた。その姿を、生徒会長は醒めた視線で見ている。

の咲き乱れた薔薇のような唇を、腹痛少女の桜色をした唇にギリギリまで近づけてくる。甘い匂い。下腹を撫でる掌が揉み込むような仕草を見せる。嘘がばれたら——茜の必死の抵抗も恐怖の前に敗れ去る。

「あつ……あのつ……つくうつ……まちがい……ほつ、ほんと……はあつ……いつ、いつしゅうかんつ……い……いっかい!!」

顔をこれ以上ないくらい真っ赤に染め上げて。とうとう茜は嘘偽りのない、恥ずかしい秘密を口にする。屈辱に震える少女の姿に、毒婦はニンマリと笑った。

「やあっぱり嘘をついてたのね? でも週一ペースですって? 女の子のわりにはお盛んなのねえ♥ いいわ、今のは信じてあげる。で。オナニー大好きっ娘の茜ちゃんは、いつでもどこを弄って悦んでいるのかしら?」

意地悪で恥ずかしい尋問はなおも続いた。掌の動きも止まらず、ぐぎゅつぐぎゅうつとお腹が鳴いた。だけどそんな恥ずかしいこと、みんなの見てる前で言えるわけがない。

「だ、大好きじゃないもんつ……つうぐ……うううつ、もう……許してえ……」

本当にお腹が痛い。少しでも刺激を与えないよう呼吸を変えて小さく息をする。お尻の孔がジンジンと痺れ、力を込めすぎたせいで感覚がなくなりそうだ。お産の時の妊婦みたいに苦しげな表情を浮かべ許しを求めるが相手は非情な悪魔。楽しそうに笑顔を絶やさず、今度は拳でコツンと腹を小突いてくる。ズシリ。直腸内部が微細な振動に揺さぶられた。

「で。いつもどこを弄りながらアへ顔晒してヨガってるのかしらア?」

二度目の質問。ゴツ、ゴツ。下腹部へのノックが強くなる。

ぐきゅううううっ！！ 腸内への振動に泣きたくなるほど恥ずかしい音が応え、一層腹痛が強まる。答えるまで、絶対に許してもらえそうにない。それにお腹が限界を迎えたら、言葉をどんなに重ねたよりも激しい恥辱が待っている。

(恥ずかしいけど……漏らしちゃうよりは、マシだよ……マシ、だよお……！！)
「ふくっ……く、く……」

観念して口を開いたものの、どうしても喉が言葉を通さない。乙女としての矜持が秘密を押し止めようとする。しかし悪魔はそれを許さない。

ズンッ！！ それまで小突くだけだった拳が茜の腹へと凶悪にめり込む。

ぐきゆるるるうう——っ！！ けたたましい恥辱音が腸内でかき鳴らされる。肛門が一瞬、ぷくりと膨れ上がった。決死の力で括約筋を引き締める。間一髪でことなきを得たが肛門粘膜に焼けつくような刺激が爪痕を残す。もう、屈辱は瀬戸際まで来ていた。

「ぐきゅううっ!? くっ、クリトリスッアうっ、クリトリス触ってるのおオッ!!」

もう必死で。茜はいやらしい言葉を、誰にも知られたくない秘密を大勢の前で吠えさせていた。

「ふうん、ここが好きなのね。お豆はちゃんと剥き剥きしてるのお？」

突き出した股間には二枚の布地を挟んでも分かるほどポツンと浮き上がった突起が見える。悪魔はそこを人差し指の腹で正確に押さえ込み、さすさすと小刻みに擦り始めた。

「ああっ触らないでえっ……剥いてないっ、そんなの剥かないよおオッ!!」

振動を恐れる赤毛少女は腰を揺さぶり逃げることもできない。快樂中枢を責められて恥丘に心地よい痺れを流し込まれる。快感がじわじわと緊張を解いてゆく。

「ふふ、敏感だから皮の上からでも充分なのね。じゃあ腔内なかの方はどうかしら？」

つぶつ。布越しの膣口に生徒会長の中指が差し込まれる。ジユクリッと快感電流が流れ出し、白桃尻がキュンッと収縮した。

「ふひっ、なかは怖くて……ああ、もうそこ触らないでえ……おなか、おなか苦しい……」

肛門に力を込めたいのに思うようにいかない。膣口へと潜り込んだ指のせいでヘンに括約筋を締めたら指まで食んでしまいそうだ。直腸内では出口を求める濁流が腸壁をチクチクと責め苛んでいる。

「じゃあワンちゃんにバージンあげるまで腔内は手付かずってワケ？」

「やっ!? そればらしちゃいやあっつ!!」

琴乃の暴露に、赤毛の虜囚は爆発寸前の直腸への振動も構わず絶叫する。そんなこと、そんな恥ずかしいこと皆に知られてしまったら——!!

(ヘンタイだと思われるッ……あたし皆から変態だっと思われちゃうウウッ!!)

「あーら、隠し通せると思っていたのかしら? みなさあん、ここにいる神楽坂茜さんの初体験のお相手は、九条流香がいつも連れてくるドーベルマン! しかも初めてのくせしてワンワンスタイルで、おしっこ漏らしながら何度もイッチャったんですからねえ!!」

生徒会男子の一人からマイクを奪った生徒会長は、鬼の首でも取ったように、会場中に響くほどの大声を張り上げ茜の忌まわしい秘密を暴露してしまう。

「いやあああつっ！ もとお言わないでっ！ これ以上恥ずかしいのばらさないでええっ!! やああつ、あるけないっ、もおおもて歩けなくなっちゃうよおおおつっ!!」

茜は必死だ。あの苦い初体験を、これから顔を合わせる全員が知ることになるなんて——とてもじゃないが耐えきれない。しかしいくら泣いても喚いても、スピーカーで増幅された琴乃の声を打ち消すことは叶わない。

「げ……い、犬……？」

「わ、ワンちゃんと……茜さんが、そんなこと……!？」

「うわ……マジ、かよ……」

生徒たちは明らかに引いている。自分を見る目が期待と尊敬の眼差しから、何か奇異なものを見るような、侮蔑の滲んだものへと変わるのが肌で感じられた。

「アッハッハ！ 馬鹿ねえ、あなたがそんな反応したら、わたしの言葉を裏づけしてるも同然じゃない——見てみなさいよ生徒たちの顔」

「あ……!!」

その通りだ。犬にレイプされた現場は実質その飼い主である流香と目の前の琴乃しか目撃していないのだ。嘘だと聞き流してしまえば、誰も信じなかったかもしれないのに——。しかも今の琴乃の口ぶりでは、まるで自分が進んで犬と交わったかのようにしか聞こえ

ない。五千人の脳内で今、ドーベルマンに進んで尻を差し出す自分の姿が描き出されている気がして、茜は身体中の血を冷水に差し替えられたように凍りつく。

「ち、ちがうの……あたし、あたしい……ふえっ、ええっ、ふええええっ……」

「茜ちゃん……ふふ、ほおんとカワイイ娘」

ちゅうっ。涙ながらに弁明しようとする唇が奪われ、強引に舌を吸われる。女のヒトの甘い匂い。唾液が吸り取られ、菌茎を舐め擦られた。小さな快感が刷り込まれる。

「ちゅっ……ウフフ——唾液で嘘が分かるなんてデタラメよ、獣姦大好き娘さん♥」

「ふえっ!? そっ、そんな……そんなああああ……!!」

その言葉に、自分がようやく琴乃に踊らされていたことを知る。しかし後の祭りだ。茜は魔女の手の上で、恥ずかしい秘密を散々暴露させられてしまったのだから。

いや、まだだ。もつと下劣で、もつと屈辱的な暴露がまだ残っている。

尋問の間にも煽り続けられた排泄の欲求は、もはやいつ限界を迎えるとも知れぬほどの高まりを見せていた。既に直腸内部は絶えずウズウズと痺れ続け、桃孔には沁みるような疼痛が居座り続けている。そしてそのすぐ手前まで、恥辱の濁流は迫っていた。門戸が開かれるのを手ぐすねを引いて待ち構えていた。

「えっぐうっ……くうっ……っ……もお、だ……め……ほんとに……げんか……いつ」

少女の顔色はもはや赤を通り越して黒に近い。脂汗は額ばかりか鼻先や頬、首筋にまで伝っていた。眉は八の字に歪み、瞳は苦悶と恥辱の涙を溢れたたせて頬を濡らす。

「そろそろ——限界かしらね。もう一度だけチャンスをあげるわ。敗北を宣言なさい。そうすればお腹の中の汚いもの、皆に見られるのを許してあげる——それとも。マゾッ気たつぷりの茜ちゃんはお腹の中の下品なニオイ、皆に嗅いでもらいたいのかな？」

尻肌は汗でびっしりと濡れ、汗をたっぷり吸った下着は更にきつく桃割れへと食い込んでくる。その狭間に息づく肛門は痙攣を起こしたようにひっきりなしにひくついていた。

「ふいいうっ、あたしそなっマゾとかあつ、ちがうううっ……うっ……ああおなか……があ……」

下腹部はぎゅるぎゅると不穏な音を立て続け、腹中では絶対に他人に見せるわけにはいかないものが豪雨の最中の河川の如く暴れまわって脆弱な腸壁を苛めてくる。お腹の内側で無数の小人が槍か何かで腸粘膜を突いているかのようだった。

（反撃の糸口なんて……糸口なんて、見つけないよおお……）

それ以前に琴乃が仕掛けてくる意地悪のせいで考える暇すら与えてもらえない。そして時が経てば経つほど便意は切迫し、冷静な思考能力を薄皮みたいに剥ぎ取られてゆく。

もう。少しでも気を抜いたり身体を揺さぶったりしたら本当に決壊してしまうところまで、ポニーテールの赤毛少女は追い詰められていた。

「さあ……どうするの？ 負けを認める？ それとも、このスパッツにステキなバックプリントでも染色してみる？」

ツツツ……右の尻たぶを生徒会長の指先がなぞる。ほんの微細な刺激だが、今の茜には鈍器で殴られるのと同等の苦痛だった。

(だめ……漏れる、漏れちゃう……みんなに、全生徒に見られちゃう……それだけはやだよ、それだけは——やだあああっ!!)

排泄の恥辱と敗北の絶望が両天秤にかけられる。どちらも耐え難い。だが、このまま意地を張ったとしても琴乃に勝てる見込みはない。それに比べて下腹部の爆弾は、恐ろしく現実的な制限時間を持っている。腸内の蠕動がギョルルツと恥ずかしすぎる音を立て迫る。必死に閉ざした肛口が沁みるような痛みを感じる。もう、猶予はない。堤防には無数のひびが入っており、軽く触れただけで決壊するだろう。

(ああ、ごめんみんな、あたし耐えられないよおっ!! ごめん、ごめん——ッ!!)

「みいっ……みとめっ……みとめま……す……負けを……認めますうぐっ……!!」

スピーカーを通して響き渡る救世主の敗北宣言。館内は一瞬水を打ったように静まり返り、続いてライトを落としたようにして会場の覇気は一気に消え失せた。

「ふふ、んふふふふ……いい子ね、とおおおつてもいい子。よく言えたわねえええ」

舞台上の琴乃は秘宝でも手に入れたような計り知れない満足感に絶え間ない笑いを込み上げさせながら、母親が赤ん坊でも愛でるように茜の真っ赤になった頬を撫でた。

「おっおねがっ……もお許してっ、はやく……はやく……お手洗いっおトイレエッ!!」

少女は必死だ。せつかく敗北を認めたのに、ここで限界を迎えたら元も子もない。

「ああそうそう。可哀想に、我慢してるんだものねえ……すぐに楽にしてあげるわ」

琴乃は小さく笑い、黒いオーラを右手へ集めると、赤毛少女の破裂寸前まで追い詰めら

「れた下腹部をやんわりと包み込む。ホウッ……日なたのような優しい暖かさが腹中をゆつくりと撫で上げてゆく。アルケミストで腹痛を止めるつもりなのだろう。」

「これでよし……と」

時間にして十秒足らず。琴乃の掌が下腹部を離れ、茜は深く息をつこうとする。しかし。

「ん……うああっ？ まっ、まだおかしいよおっ!? お腹痛いイッ、まだ痛いのおっ!!」直腸内の激痛は去ってはいなかった。毛孔の痺れもまるで変化は見られない。それどころか先ほどより一層激しいうねりみたいなのが腹中で渦巻いている。

「今、わたしのスターダストの一つ『グランブルー』を使ったわ。グランブルーは浄化の光、放射能さえ無害化する。それであなたのお腹の中を浄化してあげたの。だから」

鼻と鼻とが触れあうくらい近くに琴乃の顔が迫る。ゾッとするほどいやらしい微笑。「遠慮せずにお腹のモノ、ここで残らずぶちまけちゃいなさい」

楽しそうに弾む声での命令に、茜は床に撒き散らされたポニーテールを跳ねさせる。

騙された——!!

「やっ約束が違ううう——ツツ!! うそつきっ、うそつきいいいいつつ!!」

わんわんと喚き散らす茜。加虐心を擦るその姿に悪魔は更に邪悪に笑う。

「違わないわよ。ちゃあんと許してあげたでしょ？ お腹の中の『汚いもの』をぶちまけるのは。心配しなくたって大丈夫。今の茜ちゃんのお腹はとつてもとつても綺麗なの。」

出てくるものも透明よ。それ以外のことは——元々約束してないもの、知らないわよ」

あはははは!! 生徒会長の高笑いを浴びながら、茜は処刑寸前の冤罪者みたいに絶望に震える。こんなヤツの言うことを本気で信じた自分の愚かさを悔いるも、もう手遅れだ。

「ひどっひどいっ、ひどいよおっ……あああ……ほんとにもおだめっおなか限界イ……」

身体がブルブルと震えだす。頭の中が滅茶苦茶になり、狂乱したように首を振る。グキユルッグキユルッ……腸内はいよいよ切羽詰ったように悲鳴を上げる。もう、もたない。「ふふ、出てくるところはちゃんと見えるようにしましうね」

ずるりいっ。琴乃は言いながら、苦しみ悶える少女のスパッツとショーツを掴み一気に引き降ろした。汗によってびっちりと張りついた下着を脱がせる様はさながら本物の桃の皮でも剥くかのような。ぬちいいいっ——引き剥がされる瞬間、姫割れとクロッチの間に乳白色の糸が引いた。

「ふやあうっ!!」

ヒヤリッ。汗まみれのところを外気に晒され、火照った桃房がブルツと震える。真っ赤に色づいた桃果実はじっとり濡れていやに艶かしい。腰を突き出し脚を大きく開かされたことで股間は完全に露出し、恥丘に張りついた赤毛越しから鮮やかなピンク色をした小陰唇がありありと見て取れた。触手責めのせいかはたまたまた琴乃に摩擦されたからか、陰核はツンツと硬く尖っており、そのどれもがぬらりとした透明液に濡れそぼっている。

頭上では何十倍にも拡大された自らの陰部が映し出され、会場からはどよめきが起こる。

そのほとんどは低い男子の声。皆、自分の性器に釘付けとなっているのだ。

「ああ……ひどいよお……みんな……みちや、やだあ……カメラ許してえ……」

全生徒の前に裸の股間を曝け出されたというのに、茜の声は弱々しい。彼女にしてみれば陰部を見られるよりも排泄姿を晒す方が恥ずかしかった。秘所を不特定多数の生徒に見られるという恥辱にさえ構っていらぬほど、便意は切迫していたのである。

「いいえ、皆茜ちゃんをしっかりと見なさい。生徒会長としての命令よ。少しでも目を伏せたり、顔を背けたら。彼女と同じ体験をしてもらうからね」

その言葉に、それまで顔を覆っていた少女らはビクッと震え、おずおずと掌を膝に置いた。その中にみゆきがいるのを発見し、茜は胸が押し潰されそうになる。仕方のないことだと分かっているけど、どうしようもないくらい傷ついてしまう。

一気に増した視線の数に、生徒会長は満足げに頷いた。

「さあ、気兼ねする必要なんてないわあ。思う存分おトイレなさい。茜ちゃんが一人でちゃんとウンチできるか、学園の生徒全員で見守っていてあげるから♥」

琴乃は少女の脇に回ると肛門を覗き込むように桃房へと顔を寄せる。そして彼女によって長い恥辱の幕は引かれた。悪魔は目の前で痙攣する桜色の窄まり目掛け、フウツ、と生暖かな息を吹きつけたのだ。普段だったら大した刺激ではなかっただろう。しかし今の茜にとって、それは銃でこめかみを撃ち抜かれたも同然だった。ビクンッ!! 菊座が一際大きくヒクつき、続いてプクッと火山みたいに膨張した。

「きやああああつ!! もおだめつ、もお我慢きかないいいいいつつつ!! でちゃうつ、やあだあつ! みんなつコッチ向いちやだめつ、耳ふさいでてええ——ッッ!!」

ブビィイ——ッッ!! ブジュバツプリプリユブブウ——ッッ!!

マヨネーズの容器を踏みつけたような破裂音と共に、透明な水流が天高く打ち上がる。間欠泉のような激しい水流。それは天井まで届きそうなくらい高く高く舞い上がり、しかし重力に負け曲線を描いて舞台上へブチャアッ!! と力強く叩きつけられる。

肛門を擦りたてて噴き出す排泄物は半固形状で、まるでゼリーか何かを吐き出しているかのような。柔らかな感触が我慢を重ねた肛門粘膜をいやらしく擦りたててゆく。排泄の解放感も手伝い、赤毛少女は背骨をズルリと抜き取られるかのような激しい快感に襲われた。力が抜けてゆく。ゼリーと一緒に骨まで溶けて流れてしまいそうだ。

「アーッハッハ!! すごい音ねえ! お尻の穴が開ききって、お腹の中まで丸見えじゃない!! 粘膜まで捲れ上がらせて、下品な音立てて。そんなにいっぱいウンチ出したいの?」
勝ち誇ったような高笑い。その前で排便する自分。勝者と敗者。

「言わないでっ! そんな恥ずかしいことッッ!! だめっ止まらないのっお腹の中のとまらないっお尻しまんないっ!? やだっ、お尻の孔こわれちゃったあああつつ!!」

開ききった排泄孔は、後から後から際限なく透明の汚物を吐き出し続ける。腹中で温まったそれは白い湯気を上げ少女の恥を上塗りする。しかもその音と映像は何倍にも何倍にも増幅されて会場全体へと行き渡ってしまう。五千人が、その全てを知ってしまうのだ。



ブリユウツ、ジユビバアアツツ!! プピツプビビイイイイ—— ツツツ!!
「いやああああつっつ!! 聞かないでっこんなきたない音ッ下品なのイヤアアツツ!!
駄目ッもお映さないでッ!! カメラいやなのっ、マイクももう許してよおとおおつ!!」
泣き喚く赤毛少女の頭の上の画面では、引き伸ばされた排泄肛門がグパグパと何かの口
みたいに激しく開閉し、ブリッ、プビィッと勢いよくゼリーをひり出し続ける。

刺すような視線の雨に、身体中の肌が蒸発してゆくように粟立つ。本当に蒸発できたなら
らどれだけ幸せだろう。しかし実際そんなことなどあるはずもない。赤毛少女は舞台の上
で裸の尻を突き出し、汚らしい音を奏でながら家畜みたいに排泄を続けるしかない。

しかも許し難いことに、我慢に我慢を重ねた上での排泄は少女に並々ならぬ安堵と恍惚
をもたらしていた。羽根が生えたみたいな解放感。肛門を擦る汚物の刺激が生み出す肛悦。

「やあああ……んあつ……うああつ、あはあああ——……!!」

（ああ……なんでえっ、どうしてこんなのがきもちいいのっ?! あたしっあたしほんとに
変態だったのっ?! 琴乃の言う通りウンチ見られて悦んじゃってるの——?!）

排便を観察されて、泣き喚きながらも紅潮した頬が緩んでしまうのを止められない。自
己嫌悪に苛まれながらもその背徳感もたらす昏い悦びに、また尻がびくりと踊った。

「あ、あれ……なんか、甘い……香り……」

観客席にいる女生徒の一人が呟いた言葉が偶さか茜の耳に届き、茜は消え入りたい思い
に駆られる。赤毛少女はその甘美な芳香の正体を知っていた。知りたくなくても、気づか

ずにはいられない。匂いは自分から——自分の桃孔から発せられていたのだから。

確かに、肛門から吐き出される濁流は完全な透明だった。ただし匂いはあった。臭い、ではない。匂い、だ。

「いい匂いでしょ？ まったくの無臭じゃつまらないからアルケミストでヴァニラの香りを付けておいてあげたの。ほら、会場の最後まで美味しい匂いが届いてるみたいよ」

言って琴乃はクンクンと鼻を鳴らす。確かに不快な匂いではない。しかし、どんな芳しくとも自分の直腸で造られた、肛門から放たれた汚物の匂いであることに変わりはない。

しかも異臭であれば大抵のヒトは息を止めるだろうが、よい匂いであればあるほど人間は無意識の内にそれを嗅いでしまう。茜自身、ついその甘い匂いを吸ってしまう。

(嗅がれてる……あたしの、ウンチの二オイを……みんなが……ぜんいん、が……)

「うわあああつつ匂いイヤッ、嗅がないでっ恥ずかしいッ!! 臭くなくても恥ずかしいのおおおッ!! こんなのだよおつ、もおやだあつ……もおおやだああ……」

埋め尽くすような恥辱。塗り潰すような恥辱。圧倒的な解放感に頭の中が白くなる。排泄物と一緒に、自分自身の魂までも流れ出してしまったかのようだ。

恥ずかしい、だけど気持ちいい。それ以外、何も思いつかない——直腸内が完全に空になった時、茜は既に気を失っていた。

スパッツが限界まで引き攣って桃房を握り潰すように圧迫し、同時に爆発する。

ドウヴァブビユッドビウッピイブルウッピルッピルウウウッッッ!!

「んふほおおおっ!? おひいりいいいっ、ひあはあつまたっイクうつまたイクウッ!!」

膣内への放精最中に襲った直腸射精に、赤毛少女はそのまま二度目の絶頂へと打ち出された。流し込まれる牡液はマグマのように熱く、腹腔を満たし腸から身体へと染み入ってゆく。尻布へと染み入る白濁汁が腸粘膜に触れた傍から、腸管が狂ったように踊りだした。

「んああああ……おなかあつなかつビクビクゆつてっ、びくびくううっ……!!」

もうペットボトル一本分ぐらいの精液が流し込まれているのに男たちはそれでもまだドクンドクンと脈打ちつつ精を放ち続けた。憎むべき陵辱者の剛直を身体の内側で感じながら、茜は彼らに身を任せ快感に飲み込まれてゆくしかなかった。

※

射精は時間にして一分近く続いた。先に膣内の牡が撃ち終え、少し遅れて尻を汚す男根が欲望を吐き尽くす。その間肉穴を貫いたまま、牡獣らは震える牝粘膜を楽しみ続けた。

「ああうううっ……」

陰門、続いて肛門の牡が引き抜かれる。ぬるうっ、とした精液と愛液の滑らかな感触に果てたばかりの過敏粘膜を摩擦され、はしたない喘ぎが漏れた。前後の肉穴からはスライムみたいにドロリとした精液が逆流して溢れ出す。抽送の最中空氣が入り込んだらしい肛門からはププイイッ! と下品な擦れ音が響き、茜を死にたくなるくらいに恥辱に陥らせ

た。しかし無論死ぬわけなどなく、陵辱もまた終わりを迎えはしない。

二人が退くと、その後ろには十人以上の男が待ち構えていた。皆一様にギラギラした目つきで自分の肢体を舐めるように見つめている。

（また犯されちゃう——こんなに沢山の男子にされたら、あたし絶対妊娠しちゃう——）

先ほど煽られた懐妊の恐怖に慄く茜であつたが、彼らは少女と交わろうとはしなかつた。よく見れば先ほどまで露出していた男性器もズボンの奥へとしまい込んでいる。

代わりに無数の掌が牝肌上へと舞い降りてくる。男たちの手は餌に群がる子蜘蛛の大群を思わせた。乳房を餅突きの餅みたいに捏ねくられると否応なく乳腺が甘美な疼痛に揺さぶられる。股布を食んだままの陰部と肛門は未だ犯されているかのようだ。

「あひ、あつ……んふつううつ……そこやつ、爪でやるのいやなのおほおつっ!!」

陰核はスパッツの上から引つ掻き回され、そのたび子宮の辺りがジンッジンッと瞬くみに疼き狂う。どくどくと充血を繰り返す肉豆は薄布の内側でひとりでに包皮を翻し、露出した過敏な肉真珠を爪に襲われた茜は喉を潰したような喘ぎを上げた。

肛門には人差し指と中指がドリルのように捻じ込まれ、排泄のシミュレーションでもするみたいにじつくりと肛口をほじくり、括約筋を弛緩させてしまう。濃紺生地が牡指の感触を柔らかなものに変え、直腸粘膜に快感だけを伝える。またも沢山の人の前で粗相しているような錯覚に尾骶骨はゾクゾクと背徳に震え、更なる熱を孕んだ腸管が淫らにうねる。顔はもちろんのこと腕や脇、腹に背。恥丘から桃房、太腿から脹脛、果ては爪先に至る

まで——今の茜に男の魔手が及ばぬ部位など存在しない。女体を覆う汗と蜜を纏った指先は邪悪なくらい滑らかだ。牡は少女の身体中、細胞中から肉悦を巧みに引き出していった。肉体をグズグズに溶かしてしまいうような快楽責め。無理やり咲き乱れさせるような牡の手淫地獄に、まだまだ生娘同然の赤毛少女はあつという間に上り詰めさせられてしまう。

「あつ、はああ……んうっ……つぶああつ……ああはああんつまたつまたイク——んあ？」

喉から声を絞り上げ、来るべき絶頂快楽を覚悟したのに。身体を突き抜ける桃色の雷光はやつてこない。別に我慢が利いているわけではない。むしろ肉体の方はとうに限界を知り、悦びに塗れている。それでもパンと子宮の底で弾けるあの衝撃がどうしても訪れない。(なんでッヘンだよお……あたしの身体……さつきからすぐ……気持ちいいのに……)

身体中をまさぐられ敏感突起を抜かれ弾かれながらも、どうしても最後の一段を上りきれない。気持ちよすぎて、身体が馬鹿になつてしまったのだろうか——茜は恐怖する。

「あらあら、なんだかとても辛そうねえ？ どうしちやつたの？」

琴乃が声をかけてくる。心配そうなのその言葉とは裏腹に口調はなんと楽しげだ。まるで何かを企んでいる時のように——。

「あたしのおっからだっヘンなのっ！ おかしいいつ、あたしこわれちゃつたよおっ!」

今の茜はもう邪悪なる生徒会長に抗うこともできない。ただ押し寄せる快感に身体中を戦慄かせ、それでも決して果てることのない快楽の螺旋に半ば恐怖を抱きながら助けを呼ぶように悲鳴を上げる。頬は上気し息は確実に乱れてゾツとするほど艶やかだ。赤毛少女

が上げる発情する猫のような鳴き声に、魔女は満足したように頷いた。

「オナニー大好きっ娘の茜ちゃんへのリハビリにと思って。膣内射精されないとイケない身体にしといてあげたのよお。これで男の子と愛しあえる、立派な真人間に更正してね♥」
まるで恥じることなき善行のように、生徒会長は敗北者に施した悪意を明かした。

「せ……いえきっ……!? そんなあ……!!」

言われてようやく理解する。先ほどから男たちが挿入はおろかまったくペニスを使わないその理由。彼らは皆、自分に精液を与えず絶頂の快感に飢えさせようとしていたのだ。

悪女の奸計に乗せられ発情しきった茜は、しかしそれに憤るほどの余裕などとはやない。それでも最初は抗う気持ちが強かった。強情を張る少女に対し、牡の指先は休むことなく責めを繰り返す。身体中の穴をほじくり、唾液を絡ませた滑り指で粘膜を擦り続ける。

「ふひひいっ!? なにそれっなにそこおっだっそこさわるのいっいやっあああっ!!」

膣に潜った指先が尿道裏の快楽中枢を探り当て、押し込むように按摩する。途端に陰核を内側から捏ねられたような喜びが弾け、茜は獣じみた悲鳴を上げた。目の前が白くなるくらい峻烈な快感電流を浴びながら、しかしやはり絶頂へと至ることは許されない。ビリビリと痺れ狂う肉体を持て余したまま芋虫じみた指先に觸られ続けるしかない。

（もおやだっ、こんなくらしいのもおやだよおっ……はやくっ、はやく……らくに……）

肉体に溜まり続ける肉悦は毒のようだった。身体を蝕み、心を蝕み、しかし決してどめはささない。絶え間ない悲鳴と喘ぎを繰り返し、身体中の神経を絶えず敏感にされ、脱

水症状に陥るくらい体液を垂れ流させられて。さすがの茜ももう限界だ。どうにかして薬になりたい、それだけが少女の思考を支配する。そしてその手段は既に示されていた。

「うううっ……っふ……せいっえきい……んあ……あれば……そのっ……い、イける……の？」

「すがるような潤んだ瞳で琴乃を見上げと、魔女は悪魔の微笑でこくりと首を縦に振る。

「もちろんよお。イきたくつてもイけないのって辛いわよねえ？ だったらほら、皆にお願ひするの。身体中のいろんなお口に、ザーメン飲ませてくださいってね」

魔女に教えられ、茜は男たちに向き直る。恥ずかしい。羞恥の感情は胸の中で破裂しそうなくらい溢れていた。しかしそれ以上に、肉の疼き狂うのが我慢できないのも事実だ。

「あのっ……あたしにつ……その……えと……せい……え、き……ください……」

思いきって口にするも、その声は小さい。そもそも彼女は性的な物事が大の苦手なのだ。身体の方は無理やり淫らに蕩かされても、心はどうしても卑猥な言葉を拒絶してしまう。

「ん？ こいつ今なんて言ったの？ 声ちっさくてよく聞こえないんだけどオ……？」

「いつも馬鹿でかい声してるくせになあ。もつと指でほじくって欲しいんじゃないか？」

赤毛少女の望みなど端から知っているはずのくせに。生徒会の男子らは意地悪く言葉を交わしながらなおも少女の肢体をまさぐり続けた。乳首を強く押し潰され、乳先で桃色の火花がバチンと弾ける。二本の指を咥え込んだ前後の肉穴は蜜液と桃汁とを掻き出されるように激しく抜き差しを繰り返され、粘膜道を火が舐めるような淫熱に焼かれた。

本当だったらもうそれだけでとつくに果ててしまいたいような肉摩擦にも、肉体はただただ

蕩けるばかり。終わりのない快感はもはや拷問でしかない。

「んやあああつっ!! もお指いたずらしたらだめええつっ!! あそこの中引つ掻かないでえっこんなのやつだつひどいよおおつ…おちんちんでしてよおおおつ!!」

渴いた喉に塩水を流し込むような責めに、茜は幼児後退したようにむずかり泣き喚く。

「ふはは、なんだこいつ? さっきまで皆を守るヒロイン面してたくせによ!! ほんとはチンポ独り占めしたかっただけなんじゃねえの?」

「でもアソコだなんてお上品すぎるぜ。オマ○コだろ? 知らねえわけないよな? オナニー狂いの茜ちゃんがあにカマトトぶってんだよ。格好ももつとエロくやつてもらわないと勃たないよなあ。おねだりのポーズも台詞ももうちよい考えてやり直しな」

小馬鹿にしたようなダメ出し。屈辱が酸のように心を溶かす。傷つけられる悦びがじゅわりと弾けた。しかしそんな被虐の悦びも精液への飢餓に比べれば些細な恍惚であった。

(早くっ、おちんちん挿れてもらわなくちゃ…あたま、おかしくなっちゃう…!!)

飢えた肉体を抱いて焦燥を募らせるが、どうしたらよいのか分からない。どうしたら彼らを満足させご褒美をもらえるのだろうか。どんな格好したら悦ばれるのだろうか。

「あー茜ちゃんはお馬鹿さんだから、自分じゃなんにも考えられないのかなあ? しょうがないなあ、だったら——そうだ、お得意のワンワンポーズでおねだりしてみなよ」

「そりゃいいや、犬コロとハメまくりのお前にはうってつけじゃねえかよ!」

男の一人が冗談とも本気ともつかない口調で命令を下し、周囲もそれに追従する。

(ワンちゃん……皆の前だし……はっ、恥ずかしいけど……やったら、してくれるかな)

人の尊厳、その最後の一片までが踏み躪られようとしているのに。まるで目の前にニンジンをぶら下げられた馬のような即物的な思考が少女を支配する。ペニスへの飢餓感、精液への渴望は少女を獣にまで貶めていった。

それでも赤毛少女はほんの少し躊躇った。だがそれも五秒足らずの短い時間で、熱に浮かされたような顔をしたまま少女はすぐさま床に膝をつき四つん這いの姿勢を取る。背筋を弓なりにして尻を高く強調する。無数の視線が剥き出しの肉桃へと注がれ、スパッツの内側で桃果実が茹でられたみたいに赤く染まった。

(皆見てる……やっぱり恥ずかしい——恥ずかしいよお——!!)

獣の姿勢のまま、赤毛少女は激しい恥辱に打ち震える。しかし今、茜にとつてその感情は不快感を示すものではなくなっていた。背筋を這い上がるゾクゾクという電流は股座の肉割れへと直結しその潤みをより加速させる。股布にジュワリと蜜が染み出す。「おっ……おちんちん……ください……あたしにっ……ザーメン飲ませてエッ!!」

股間の疼きに追いたてられるように、少女は苦悶の表情で男たちに懇願する。その様子に男たちは互いに目配せをした後、再びそれぞれの牡をチャックから取り出した。

「くく……ほおら大好きなチンポだぜえ。そのカッコのままここまで歩いて来いよ」

男の一人が己の一物を軽く上下に揺さぶる。それを目にした少女はポニーテールを振り乱し、子犬のような健気さでよたよたと男の足元へと駆けていった。

しかし彼女がようやく男の下へと辿り着こうという寸前になると彼はサッと退いて赤毛少女におあずけを食らわせる。他の男たちも同様だ。みんな彼女の欲する肉根を目の前でちらつかせながら、決してそれを与えようとはしないのだ。

「いいじわるしないでえっ！　ちゃんとワンちゃんしてるよおっ!?　おちんちんちようだいっ、ザーメンちよおだいよおおっ!!　わんっわんわんっ!!」

痛々しいほど必死に男を強請る茜は犬真似が足りないのかと家畜の鳴き真似まで始める。「あっはっは!!　こいつマジでプライドねえよ!!　頭の中も犬並みなんじゃねえのっ!」

「ほらワンコロ、チンポしゃぶらしてやる。上手だったらマ○コぶち込んでやるぜ!」

ようやく鼻先に牡根を差し出され、少女は男の股間に顔を押しつけるようにしてそれを啣え込んだ。男の臭いが呼吸を満たし、頭の中がクラクラと酩酊する。

「はむうっ♥　あむっ、んっちゅぶうっ、んおっ、ふおおむうっ……」

もう逃がさないと言わんばかりに男の尻へと手を回し、陰毛へ鼻先を擦りつける。ムツとする牡の汗の臭いに対してもう不快感など微塵も感じられない。そればかりか吸い込むたびに胸が高鳴る。舌に広がる塩味がかった粘膜の味に唾液がじゅるじゅると溢れ返った。

(おいひいっ!　男の子のっ、おちんちんってこんなにおいしかったんだああ……!!)

男の股間へと顔を埋めた赤毛少女は陶酔しきった惚け顔を浮かべる。両端から唾液を垂れ流す唇をきゅっと結んで啣え込んだ男根を締めつけ、犬の姿勢そのままに首を前後へと動かす。口内では舌先を絶えずチロチロと蠢かして裏筋の縫い目をじつくりと舐め擦る。

カリ首の溝には恥垢がこびりついており、味蕾が触れるとピリッとした刺激が舌を刺した。だが少女はそんな不潔な汚物までをも嬉々として舐め取り、丁寧にごそぎ落としてゆく。

「あむっ、はむちゅぷっ、んちゅっんちゅっ、んふうううっ…あむうぶふうう…っ♡」

口淫奉仕の前後運動に乳房がぶるんぶると踊り、顔面を前のめりに突き出すたび突き上げられた尻からはスパッツ生地をめり込ませたままの姫割れと肛門が闇色の洞穴を覗かせていた。犠牲器の臭いと味に牝の本能が刺激され股間がズキズキと疼く。早く挿入れてほしい。でも同時に、もう少しペニスの味を味わっても良かった。

他の男たちも彼女の周りに集まってくる。勃起が左右から赤みの差した頬をむにゅりと押し込みその愛らしい顔面を淫らに歪めた。

「あぶっ、おひんひんッ!! あつたかあっ…ほれにいつひゅごいにおいしい♡」

どれもこれも全部しゃぶりたい、しかし剛直は一本唾えるのがやっとの大きさだ。少女は口内の一物が精を吐くまで周りの牡が逃げないよう、いやいやをするようにして首を小さく左右に振って周囲の牡根を摩擦する。舞台上の男全部を独り占めしようという赤毛少女の浅ましさに男たちは下品に嘲り笑う。

ぐにいつ…濃紺尻に男の灼熱が触れた。挿入れてもらえるッ!? 一瞬期待を胸に瞬かせるも、男ははぐらかすように桃割れに欲望を挟み込んで尻谷間で抜き始めた。

「あはっいいいい♡ おしりっ擦れてエッ…もっ、もっとしたあ…もおちよっとしたもおおっ♡」



熱い男根に何とか陰裂にも触れてもらおうと尻を更に高く突き上げ男を誘う。くちゅりつと肉割れに剛直の胴部分がめり込み、久しぶりの牡との再会に牝粘膜がざわめいた。

「へへ、チンポしゃぶるの結構うまいじゃないか……うつくそ、もう射精するっ!!」

焦燥した声を上げた男子は茜の後頭部を抱え、無理やり自らの股間へと押しつける。

「んぶうつ?! ふごつむぶぐうつんおつんごおおおつ!!」

息を奪われた赤毛少女は眼を見開き喉奥で悲鳴を発する。しかし男は気にも留めず、腰をズンズンと激しく前後させ、喉奥の柔らかな肉を穴が開くほど突き回しながら射精した。ツビユルッ!! ドビユルッドビユルッビユルッウウウツツ!!

「おごおおおつ!! つごほつごぼおんおおおおおつ、んごおむほおおおつ!!」

食道への直接射精を浴びて、激しくむせ返る。嗅覚を潰しそうなほど強烈な精液の臭い。逆流するザーメンが口腔を満たすと味覚が麻痺したような感覚が広がった。まるで口の中が性器にでもなったみたいだった。頬の内側を擦られるだけで、身震いするほどの喜びが迸る。快感は下半身まで伝播しペニスを挟み込んだ桃房がギュムウツと収縮した。

「んごおおつ……んつ……ごきゅつごきゅつごきゅんつ……ぶはあつ♡」

喉を鳴らして濃密な牡液を飲み下す。尻も淫らな円舞を止めず、摩擦する牡の逞しさに秘唇はますますもって水飴みたいに蕩けきっていった。

「んふあつ……もつとおちんちんつ、ザーメンちようだいっちようだいっつ!!」

射精を終えた男根を吐き出し、新たな牡を欲しがって鼻声で牝鳴きする。まだ足りない。

もつと飲みたい。ザーメンの味を知ってしまった牝犬少女は飢餓感を募らせるばかりだ。

「——おい茜ちゃん、ちょっと向こう見てみ」

背後で桃割れを颯る男子が少女に耳打ちする。言われるままに観客席を向くとそこには。

「ひっ!？」

冷たい——氷みたいに冷やかな視線。嘲るような、馬鹿にしたような、哀れむような

——様々な感情の交錯した視線。だが、茜を蔑むことだけににおいては皆一致していた。

卑しい牝の本性を曝け出したかつての英雄に、仲間たちは皆冷たかった。生徒会の牝奴

隷は周囲の反応を敏感に感じ取る。

——拒絶。それはひとりぼっちが大嫌いな少女にとって、一番恐い感情だった。

「な：なんでっ、なんでみんなそんな目で見るのお……ひどいよ、だつてあたしは……」

皆の身代わりとしてこの身を擲^{なげ}っているのに。自分を貫く氷柱のように冷たい視線の雨。胸がキリキリと痛い。悲しみが心臓を鷲掴み、握り潰してくるかのようだった。

「ほら、あいつらなんて所詮お前を都合のいい正義の味方にしか思っていないんだぜ？役に立たないと思つたらすぐああさ。可哀想に、頑張ってるキミを汚いものでも見るみたいにさ——でも俺たちは違う。今の茜ちゃんを、本当のキミをとつても愛してるんだ」

ぼっかりと穴の開いた茜の心に入り込んでくるかのように。すかさず背後の男が甘い声でそう囁いた。いつもだつたら一笑に付せたであろう口車。だが、うわべだけのそんな言葉さえ、今の彼女には身体を優しく包み込む陽だまりのように温かく感じられた。

「ほっ、ほんと……？ あたし、こんなあたしでもその……好きでいてくれるの……？」
唾液と精液、そして自分のだだ漏らした多種多様の牝汁に塗れた姿は彼女自身受け入れ
難いほどに下品でいやらしい。そんな自分を受け入れてくれるなんて——。

彼女をそこまで汚したのは当の彼らであるはずなのに。激しい性交に酸素を欠いた赤毛
少女の頭からはもうそんなことはすっぽりと抜け落ちていた。いやらしい自分が本当の自
分。そしてそんな本当の自分を、彼らは受け入れてくれるというのだ。好きだとさえ言っ
てくれるのだ。偽りの幸福が胸を熱くし、少女の心を護っていた氷が急速に溶けてゆく。

「もちろん。みんな茜ちゃんのことを、裸のキミ自身を大好きなんだ。——だからさ。向
こうの連中にたっぷりと見せつけてやろうじゃないか、俺たちの愛の深さを」

周りの男は必死に笑いを噛み殺していたが、茜はそれに気づかない。この人たちは自分
を愛してくれてる、必要としてくれてる——発情に壊れた彼女の頭は容易にそれを愛だと
信じ込まされてしまう。偽りの恋愛感情を植えつけられ、生徒会の男子ら全員が自分の思
い人のように愛しくさせられてしまう。

「うんっ、うんっ……するっエッチなことするうっ♥ してっあたしのことめちやくちゃ
にしてええっつっ!!」

男の甘言に嬉しくされた赤毛少女は拾われた子犬のような気分で男たちに対し従順に尻
尾を振る。尻尾のない茜は肉付きのよい尻をクンクンッと上下に揺さぶり牡をねだった。
「ふふ、茜ちゃんはほんとにチンポ大好きなんだねえ」

男の侮蔑にも悪意を読み取れず笑顔を返す。恋人の言葉はどんな蔑みも甘言であった。「うんっおちんちん好きっ！ ちんぽ大好きィィッ!! だから挿入れてっあそこにもっお尻にもしてエッ!!」

恥という概念を消失したように、赤毛の牝奴は下品な言葉を躊躇いなく吠えたり周囲を見回す。男たちはほくそ笑み、会場は更に深く沈み込む。

「あそこじゃないだろ、ちゃんとオマ○コって言えよ」

「あ…ごめんなさいっおま○こっ、おま○こですうっ！ 茜のおま○こにみんなのおちんちん挿入れてっズブズブっしてえっ！ ザーメンどびゆどびゆっっておなかのなかだしてっ、そんでまたいっばいっばいイかせてええっ!!」

叱られて、泣きそうな顔ですぐさま言葉を淫らに直す。会場の皆は自分を嫌っている。その上この人たちにまで捨てられたら、本当に一人ぼっちになってしまう。

(そしたら、もうエッチしてくれなくなるっ！ おちんちん誰もくれなくなっちゃっ!!)

彼らの機嫌を損ねないように、ちゃんとご褒美をもらえるように、媚びた瞳で陵辱者たちを見回しおねだりを繰り返す。

「よしよし、そんなにチンポが好きならなあ…：…今度は自分で動いてみせな」

仰向けに寝そべった男子が屹立する一物を指差し彼女に命令する。餌を与えられたペックトみたいに、ポニーテールの奉仕係はすぐさま剛直へと擦り寄り両手を添えて扱きたてた。「くくっいい娘だ…：…そのまま跨いで自分で挿入れるんだ。楽しいお馬さんごっこだよ」

「ひゃあつ♥ おうまさんごっこするっ、おちんちん挿入れるうつつ♥」

少女は嬉々として男の腰を跨ぐと、和式便所に腰を下ろすようにして大きな尻を落とし、男の胸板に片手をつき、もう一方の手を男根に添えて自らの肉壺へと誘導してゆく。

くちゅっ。先端が潤みきった膣口に嵌まる。そのままゆっくりと腰を落とし牡を飲み込む。にゅるうううっ——牡と牝の粘膜同士が滑らかに絡みあい、茜は剛棒を根元まで啜えた。

「んっふううっ♥ はいったあ……ふひっ硬いっ、おちんちんすっごくういっ♥」

待ちに待った牡肉に肉壺はグキュウツと食いつくように収縮し、奥へ奥へと飲み込んでゆく。膣粘膜とペニスの表皮が溶けあうかのようにびったりと張りつき、胎内を淫熱が満たして子宮までもが蕩けていった。

「んあっはああわあああ………♥」

あまりの快感に、茜は尻を男の腿へと降ろしたまましばらく動くこともできず、ぶるぶるッとその身を戦慄かせていた。跳ね上がるポニーテールが牝体臭を振りまき、プルンップルンッと踊る乳球が牡を誘う。しばらくして少女は膝立ちとなり腰を動かし始める。

ぬるうううっ、じゅずぶっ！ ぬぶぶうううっ……ずぶるっつ！！

「んうううっ……んはあつ♥ ふあっはあつ……んっうううっ……きゃはああんっ♥」

ゆっくりと腰を上げてカりに膣道を摩擦させ、亀頭先端が膣口まで戻ったところで重力に任せて巨桃を落としまた刺し貫かれる。ペニスが膣道を出入りするその速度を自由にコントロールできることで、少女は自分の一番気持ちいいペースを探り当ててゆく。

「コッチの穴も寂しがつてるんじゃないか？ モノ欲しそうにヒクついてるぜ？」

汗まみれの桃たぶが男の指に割り裂かれ、スパッツ越しの菊座を露出させられる。ピリツと切ない恥悦の火花が弾け、直腸奥からじゅわりと腸液が滲み出た。

「ふあうっ、お尻にもしてっしてえっ♥ せええきすきっだいきいっ♥」

濃紺の桃穴をヒュクヒュクと収縮させて挿入をねだる。恥も外聞もないその浅ましさに男は嘲笑しながら牡槍の先を放射線状の中心へと当て、一思いに刺し貫く。

ズニイツズニユズニユズグニユグリユリユウウウウウ—— ツツツ!!

肛門へと潜り込んできた牡は彼女のアナルバージンを奪った男子と比べものにならないほど大きかった。直腸を串刺す龟头は薄生地をめり込ませたまま結腸手前にまで届かせてしまう。凄まじい圧迫感はそのまま喉まで届くのではと錯覚させられるほどだった。

「おほおっふとおひいっ♥ いひっひいっおひいっおひりいこわれちゃうっ♥」

肛門が引き裂けるほどの激しさに嬌声を上げる。気絶しそうなぐらいの痛みであったが、肉悦に狂った茜にとってもはや痛みは快感の一種でしかない。

「くくく……でかいだる俺のチンポ？ これでぶっ壊してやるよ、お前のケツ穴。これから毎日オムツしてなくちゃいけないくらい、ガバガバの開きっぱなしにしてやるからな」
ずぬゆっ、ずぬゆっ、ずぬにゆうっ、ずにゆううう—— つつ……長竿は長さとそれに見合わぬスピーディーな動きで赤毛少女の腹中をいのように掻き乱す。ペニスが肛門から出入りするたび、直腸を引っ張り出されたり押し込まれたりしているかのようだった。

こんなことを続けられたら本当に壊れてしまう。しかし茜の表情は恍惚一色だ。

「んはあつ、こわしつ壊してつおちんぼであたしのおしりいっぶつ壊してえええつつ♡」

邪悪な言葉も恋人の甘い囁きにしか感じられない。狂乱する少女を更に乱れさせようと、尻孔を削るように掘り進む男は背後からブラウスごと制服を引き摺り降ろし、二の腕までを完全に露出させる。剥き出しとなった背中は汗にまみれながらもシミ一つない乳白色だ。それを背面から抱きすくめると、鎖骨にかかったスポーツブラを力任せに引き千切り豊満な乳房を乱暴に鷲掴みにする。

「ひわああわあああ——つっおっぱいいイッ!! ジンジンっていつてるううつつ♡」

ぎゅにいいいいつつ!! 力いっばいの搾乳に乳腺が千切れそうなほど熱く震え、内側で爆発するような乳悦は今にも乳先から母乳となつて噴き出してきそうな勢いだ。

「ほら、お待ちかねのチンポならまだまだ沢山あるんだぜ」

「自分だけヨガつてないで。さつきみたいに身体中使つて、俺たちを満足させてくれよ」
騎乗位で前後から貫かれる最中ペニスを露出させた男子が群がり、少女は狂喜する。まるでお誕生会で自分の好物ばかりを並べたテーブルを前にしたように眼を輝かせる。

「うわあつ♡ おちんちんっ、おちんぼいっばいいい♡ すきいっはやくちようだいっ!!
お口もっおっぱいにもおっせんぶちようだいっ!! ザーメンほしいのおおつつ♡」

一番傍にいた牡に、赤い髪の奉仕係は麒麟のように首を目いっばい伸ばして食らいつく。更に左右へと手を伸ばし触れた男根を躊躇いなく握つて引つ張るように引き寄せる。

「ふやつはふつむううつつ♥ おいひいつ、おひんひんおいひいひいひいつつ♥」

唾液を垂れ流しペニスをしゃぶる少女の乱れぶりに半ば呆れながらも、男たちは自らの欲望も解放し魅力的な肢体へと押しつけ、摩擦し、牡の臭いを牝肌へと植えつけていった。耳に押しつけられた亀頭は狭い耳の穴にまで入り込もうとでもいうように激しく突きを繰り返し、敏感な耳朵を牡熱でもって甘く蕩かせてゆく。

りんご色の頬にはその愛らしい顔を汚してやりたいという男が殺到し、左右から顔を潰さんばかりにぐにぐにとめり込んだ。剛棒は鼻先にまで押しつけられ、鼻腔に先走りの汁を塗布してゆく。喉元にまで突きつけられた茜の視界は男とそのペニス以外何も見えない。「んひあつ、んひいいやああつつ：はぶうつ、おへそついひつ!! 熱いイイイッツ♥」

緩んだ脇にも男根は巧妙に滑り込み、汗にまみれた脇下を見立てて扱きたてる。その下のわき腹、更に臍の窪みまでが男根の餌食となった。肌という肌に牡性器が食らいつく。後頭部では押しつけられたペニスの激しすぎる勢いに、山吹色のリボンが解けて少女の束ね髪がふあざりと音を立てて解き放たれる。少女の甘酸っぱい汗の匂いが一気に解放され、周囲の牡の劣情を一際強く押し上げた。

「くく、その髪型も可愛いじゃないか——女の子らしい女の子って感じだぜ」

男の真意は犯す対象の新鮮味が増した、ただそれだけだ。しかし発情の擬似恋慕に毒された生徒会の奉仕係は、恋人に髪型を褒められたような甘酸っぱい気持ちにさせられる。気持ちいい。身も心も、全て満たされてゆくような気分——だというのに、舞台の下の

沢山の生徒たちはなんであんなに暗いんだろう？ あの女の子なんて涙まで流して――。

「なんでっみゆきちゃん泣いてんのおっ？ みんなもお…なんでそんな顔してるのおっ!? きもちっ…いいんだよおっ!? すごいのっみんなもっこっち来てしようよおおっっ!!」

観客席へと呼びかけるその表情は焦点が合わず、壊れたような薄笑いを浮かべている。彼女が呼びかければ呼びかけるほど、少女と生徒らの心は離れていった。

「おおっすげえ腰使いっ…：：：腔内なかもぐによぐによ蠢いてて…：：：こりゃ茜ちゃん、卒業後の進路はソープ嬢に決定だなあ！ くううっ…：：：俺…もうっ、イきそうだっ…：：：!!」

男は茜の腰骨を掴み、自らも腰を使い始めた。ズンッズンッと突き上げるペニスの逞しさに子宮を押し上げられるたび、股座から頭の天辺までを桃色の閃光が突き抜ける。

「んふひいつ、だしてっ射精してえっ♥ おちんぼっどびゅどびゅっていっばいちようだいつ!! あたしのなかにっ、おま〇ここにいつあつたかいのちよおだあいつつ♥」

じゅぷっ！ にゅぷっ！ ずにゅぷうううっ!! 男の腰使いに負けまいと豊臀を揺さぶり挿抜をより淫らなものにする。抜き差しのたび蜜が溢れて男の腹をびっしり濡らす。

「うへへ…いいのかあ、危険日なんだろお？ ガキができても知らないぞお？」
真下から突き上げる男が意地悪く尋ねるが、その顔面へと唾液を垂れ流し喘ぐ茜にとっ

てはそんなやりとりさえもどかしい。

「いいっ♥ 好きだもんっあかちゃんできちゃってもいいっ♥ きもちよくしてっせええきっせええきいっばいほしいのおっっ!! だからっはやつはやくううっっ♥」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>